

## 巻頭言

## メディアセンター機能の未来

あかぎ かんじ  
赤木 完爾  
(メディアセンター所長)



2015年4月に田村俊作教授の後任としてメディアセンター所長に就任した。その前は2009年から三田インフォメーションテクノロジーセンター所長、2011年からはITC本部所長として6年にわたって携わってきた。電気や水道と同じように、今や社会的インフラとなった情報システム基盤の全塾における構築・維持・強化という業務の重要性を強く認識させられた年月であった。

私は政治外交史の一研究者であるが、これまで本務の研究と教育以外では、塾内では図書館とITC、塾外では文書館や博物館の活動とかかわることが多かった。なかでもわが国において初めての本格的なデジタルアーカイブである国立公文書館アジア歴史資料センターには、その設立準備室が内閣官房にあった時代からほぼ20年にわたってかかわって来た。

こうした経験を通じて得た知見を、今後の図書館の業務にどのような方向で生かすことができるかをあれこれ考えている。現時点で確実に言いうることは、今や図書館が、紙の書籍や雑誌にとどまらず、デジタル化された学術情報の出入口となっていること、および図書館と図書館職員の専門的能力が学術情報の獲得・提供や発信に不可欠であることを、あらゆる施策の前提としてしっかりと把握しておく必要があるということである。

今日、大学のあらゆる業務においてコンピューティングが活用されていることは改めて指摘するまでもない。1990年代に情報通信技術の利用が爆発的に拡大したとき、図書館の業務やそのあり方もまた猛烈な変化を経験することになったように思う。

「恰も一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」とはよく引かれる福澤先生の『文明論之概略』緒言の一節だが、図書館が直面した変化も同様のものがあつた。私が1990年代なかばにイエール大学に滞在していた時に体験した学問的基

盤の環境変化は、顧みてやはり革命であつたと思う。私の世代はこの時期にブラウザ（Netscapeなるものがあった）、ポストスクリプト、PDFといった言葉に生まれて初めて接して、それらを使い始めたのである。

図書館の場合には、確立した伝統的な業務が存在し、それらにこうした情報通信技術が被さって来たのであり、本塾図書館はこの環境の激変によく対処し適応し得たものだとの感想を持っている。その後、メインフレームからサーバクライアントへとコンピューティングのシステムが進化変容するなかで、積み重ねられたデータとともに、巨大なソリューションが構築されているのが現代の図書館システムであるように観察している。

「歴史的経路依存性」という言葉がある。ある過程の始まりの小さな出来事が、その終わりには大きな違いを生むという意味である。ことに学術情報基盤の構築と展開については、ある時点の一つの小さな判断が後々に大きな影響を与えやすい。そうした意味では、図書館を取り巻く環境の将来像を何よりも的確に展望することが重要である。本塾図書館が、その基盤の国際標準化に早くから着目し意を用いたことは、今日までの帰結を顧みるとき、まことに高く評価すべき実績である。

図書館が担う機能の将来について、おそらく一つ確かなことは、教育・研究への資料提供が、自らが収蔵しているもののみならず、紙あるいはデジタルといったかたちに関係なく、商業ライセンスを得て提供するものや、学外の図書館や文書館の連合組織と提携して提供していくものに拡大していく趨勢であろう。教育・研究サイドからの要請を不断に踏まえつつ、果たすべき機能について大胆に将来を構想する時期が近づいているように思われる。